

天邪鬼のモンハン漫遊 記

名無しさん@おなかいいっぱい

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

処女作です。

また、主人公最強、オリキャラのみの小説となつております。苦手な方はブラウザ
バツクを推奨します。

第一話

目

次

第一話

突然だが俺は人間ではない。

じやあ何かって？まあ、わかりやすく言うなら妖怪だ。

何の妖怪か？そうだな、『天邪鬼』つてどころか。

まあ細かいところは違うけど、大体はそうだ。

そして天邪鬼は一応神様なわけだから神性が多少なりともある。

なんにせよ俺は天邪鬼なわけだから、ちょっとした技が使える。俺はそれを能力つて呼んでいる。因みにどういう能力かというと、『あらゆるものをひっくり返す能力』だ。このあらゆるものとは、文字通り万物万象をひっくり返すことができる。

強すぎるのは自分でも思う。しかし、ものをひっくり返すことは妖怪が持つ『妖力』ないし神様が持つ『神力』が必要になつてくる。それはものが大きくなる、多くなるにつれて必要量も上がっていく。

例えは、人を一人ひっくり返すのに必要な妖力または神力は百を全体とした一でいい。だが家をひっくり返すには五必要だ。

因みに俺の妖力の量は五億だ。だが神力は二千だ。

なんでこんなに妖力が多いのかは、俺は人を恐怖に陥れたり、殺したりしすぎた。すると妖怪としての格が上がり、妖力が馬鹿みたいに所有できるようになつた。神力の方は人に嫌がらせなどをする時に結果が転じてそいつにとつていい事になつたからだ。

さて、ここまで長々と話をしたが、それはただの現実逃避だ。
なんの現実からか、それは――

――俺、モンハンの世界に飛ばされたっぽい。

何を言つてゐるかわからないと思うが、俺もよくわからない。
わかつたことはこの世界がモンハンの世界つてことと俺がモンスター扱いされて
るつてことだ。

なぜモンスター扱いされてるかつて？

それはこの世界に飛んだ時に体がモンハンでいうところの迦異種イナガミになつて
たからだな。しかも色が赤と黒と白の。おまけに角は赤つていうより紅になつてる。

さて、そんなわけで俺を狩猟しに来たハンター達には土にお帰りいただいた。

そしてそうしていたらいつの間にか俺は『紅魔の神獣』と呼ばれるようになつた。

紅魔といえば東方やミラボレアスなどが思い起こされるが、まあそれらは全く関係ない。いや、ミラボレアスは世界的には関係あるか。まあそんなこんなでよく討伐以来を
出される俺だが、姿以外にもほかのイナガミと違うところがある。どうやら俺は普通の
イナガミと同じ属性と二つ名通りに『紅魔属性』が扱えるようで、龍属性と火属性が扱
える。

それがさらに脅威になつてゐる故に、俺の討伐にはG R 8 9 9のハンターしか向かわ

せていないようなのだ。

だが、俺はあくまで妖怪であつてモンスターではない、そろそろこの生活にも飽きたから珍しく人助けでもしようかと思う。理由はそれをしてことによつて神性が上がり、より力が増し、強大な神になれるからだ。

さて思い立つたが吉日、俺は能力を使つてモンスターから人になり、その際に発生した俺の素材を持ち運ぶ。因みにポーチは俺が殺したハンター達からいただいた。

まあ武器を持つていないと不自然なので、俺は俺が殺したハンターから装備を剥ぐ。

俺が装備したのは

太刀：『ゴーレマシユット』

頭：アカムトGXサクパケ

L v7 キリン射珠GX2 G級・怒剛珠 キリン

射珠GX2

胴：キリンGXベスト

L v7 G級・怒剛珠 キリン射珠GX2 G級・怒

剛珠

腕：ルコGXクロウ

L v7 グレン剣珠GF グレン剣珠GF グレン

剣珠G F

腰：ボボルムGXフォールド

L v 7

グレン剣珠G F

グレン剣珠G F

ルコ剣

珠GX 3

脚：ルコGXフット

L v 7

G級・護閃珠

G級・護閃珠

集労珠G

だつた。きっと大層時間とアイテムが削られたであろう装備だ。

俺はこれを装備し、自分の巣から旅立つ。思わず飛びそうになつたが人間になつたのでそれは自重した。

さて、俺は今旅をしているわけだが、どうも森で迷つてしまつた。今まで迷うといつたら数える程なので、少しショックを受けたが、それも僅かな時間。

ついさつき、少女の悲鳴のようなものとモンスターの鳴き声が聞こえた。

おそらくジンオウガだろう。遷悠種が来るとは思つていなかつたが、力加減を知る絶好のチャンス、逃す手はない。

俺は迷つてしまつて疲れ果てた体に鞭を打ち、声の聞こえた方へ走り出す。

俺が着いた先にはやはりジンオウガがいて、少女のことを噛み殺そと大きく口を開けているところだつた。

「せい！」

俺は急いで走り出し、ジンオウガを太刀で吹き飛ばす。
思ったより火力が出たな。

「……え？」

俺の後ろから少女の声が聞こえたので振り返つて見ると、少女が目を丸くしてこちらを見ていた。

「よう、大丈夫か？」

俺は太刀を肩に担ぎ、少女に安否を聞く。

「あ、はい。大丈夫です」

少女は軽く混乱していながらも俺の質問にしつかりと受け答えをした。

「ちょっと待つてな。トドメを刺してくる」

俺は満身創痍のジンオウガの方へ太刀を抜いて走り出し、走りながら地面に太刀を走らせ、ジンオウガの前まで来てから振り抜く。それでもまだ死に切らないので最後に『解放連撃』という技を使い、ジンオウガを仕留める。

「つし、終わりつと」

俺はジンオウガの素材を剥ぎ取り、少女の方へ向かう。

「無事か？」

「はい。あの、ありがとうございました」

少女が礼儀正しくお辞儀をしてきたので、俺は別に気にすることじゃない、と言つた。

「そうだ、この近くに街か村はあるか？ 実は俺、旅をしてたんだ。そろそろ腰を落ち着かせたいから街か村に行きたくてな」

「そうなんですか。じゃあ私の村に来てください。ここからすぐなんですよ」

お、どうやら俺はついているらしい。

よし、じゃあ村に着いたら俺の素材で装備でも作つてもらうかね。

俺が少女と歩いていると、少女が話しかけてくる。

「あの、お名前を伺つても…？」

ああ、そういうば言つてなかつたな。うーんそうだな、特に決まつた名前はないんだよな、飛ばされる前から。生き残るために名前なんてコロコロ変えてたし。丁度いい、じやあ今作るか。そうだな、『エア』なんてのはいいんじゃないか。メソポタミア神話で知恵の神とされる神の名前だ。このモンハンの世界で俺のようにすべてのモンスター

の知識を持つてるやつはまさに知恵の神だろうからな。

「ああ、いいぜ。俺の名前はエアだ」

「エアさん：いい名前ですね！」

そう言つてくれると嬉しいが、俺の本当の名前という訳ではないから少しアレだな。
まあ、この世界ではこの名前でずっと通すか。その内馴染むだろう。

「お前の名前は？」

「あ、はい。ルトナといいます！」

「ルトナか、いい響きじゃないか」

さて、そうしているとどうやら村についたようだ。
「ここは…ユクモ村か。

ルトナが門番に話をして事情を伝えると、門番は俺を快く通してくれた。
門を通ると、そこは絶対にゲームでは味わえない様な絶景が広がっていた。

ユクモ村つてこんなに綺麗だつたのか。

「どうです？この村は」

ルトナが俺の方を振り返り、笑顔でそう問う。

「…とても、いい村だな」

「でしょう？」

ルトナは俺の言葉に一層笑顔を深める。

「エアさん、今からあなたにはハンター登録をしてもらいます。ついてきてください」

ルトナはそういうが早いが、さつさと集会場の方へ向かつて行つてしまつた。

「ハンター登録…か」

俺は一言そう漏らし、ルトナのあとを追う。

その道中色んな人に挨拶をしていたが、その途中で村長に挨拶はいらないのかなー?とか思いながらルトナのあとを追うのであつた。